

### 第3分科会「海外の中等教育段階における日本語教育の現状 3カ国の発展段階から見る」

第3分科会では韓国、ベトナム、インドからの発表者がそれぞれ25分程度発表し、中等教育で使用されている教科書やさまざまな情報を提示し、参加者と意見交換をした。

#### 1. 李英淑（韓国、済州観光産業高等学校）

##### 「韓国的高校における日本語教育の現状」

韓国では、1973年に高校で日本語教育が開始されて以来、2004年現在、全高校生の32%が日本語を学習している。特に日本語は第2外国語学習者のうち、最も多くの割合を占めている。これは他の国にはない、韓国の中教育における日本語教育の特徴とも言えよう。発表は、まず2007年現在、施行されている第7次教育課程（学習指導要領）の具体的な内容を紹介した。その後、教育課程の方針を運営する上で、実際の教育現場で現れているいくつかの日本語教育の問題点を、主に発表者の所属地域である「済州」を例に説明した。最後に、教師と学習者にとっての日本語教育の困難点を踏まえ、今後の課題としてその改善策も提案した。今後とも、韓国では日本語学習者の増加が予想される。韓国の中教育の中心部である高校での日本語教育が初期の目的を達成する上で、このような取り組みがその第一歩になるのではないかと考えている。

発表のあと、自国の教科書の実物と2008年度の修学能力試験（日本のセンター試験に相当）の日本語の出題問題を紹介した。質問には、済州の高校の日本語学習者の到達目標のことや、「済州日本語教師会」の活動についてのことがあり、補足の説明をした。

#### 2. ゲン・ホン・トゥー（ベトナム、ホーチミン市師範大学）

##### 「ベトナムの中教育段階における日本語教育の現状」

ベトナムでは2003年より課外科目として日本語教育が始まった。ハノイを初め、ホーチミン、フエ、ダナンにおいて、それぞれの地域の学習環境に合わせ、日本語が導入された。2005年より日本語は正式な科目となり、また2007年より第1、第2外国語科目として全国で実施可能となった。実施機関数、学習者数、教師数は年々増えている。現在、使用している教科書はベトナムと日本の共同開発のものであり、中学校1年生から4年生のものが完成している。授業方法としては達成感・満足感を与える、生徒の集中力を持続させる、生徒自身に考えさせ、調べさせる、また発見したことを発表させるということが重視されている。問題点としては教師不足が挙げられるが、今後、ホーチミン市師範大学で教員養成コースを行う予定があるため、この問題も数年のうちに解決されるのではないかとと思われる。ベトナムの中教育段階における日本語教育は始まったばかりだが、ますます発展していくことが期待されている。

発表後に参加者から、ベトナムの新しい情報の提供、このプロジェクトの目標（3級合格）に対する疑問、フィリピンの中教育段階における日本語教育の状況との比較などのコメントがあった。また、NIESAC（ベトナム教育カリキュラム戦略院）についての質問があり、教科書とテスト問題には多くの参加者が関心を持った。

#### 3. パンダ、ナビン（インド、デリー大学）

##### 「インドの中教育における日本語教育政策 その導入と教科書作成について」

インドの中教育機関では、上記の二国と違って、2006年に日本語教育が始まったばかりであり、その歴史は浅い。しかも、インドの中教育を運営する三つの機関のうち、中央中教育機関だけが日本

語教育を導入しているため、全国的には広がっていない。しかしながら、中央中等教育機関が全インド日本語教師会や国際交流基金との協力で、学習者に負担がなく、かつ面白く日本語を習得できるようなコミュニケーション型な、6年生と7年生向けの教科書を作成するなど、日本語教育が活発に営まれるような環境を作る取り組みが進んでいる。さらに、インドでは英語が外国語とみなされていないので、外国語としての日本語教育が広がる可能性があることが示唆された。

質疑応答では、主に、教科書作成の際に直面した問題点と中等教育の教師の研修についていろいろな質問と意見が出された。さらに、教科書がコミュニケーション型でよいという評価もあった。

